

3 畑作物(さとうきび)の生産安定と稼げる経営の確立

【成果の要約】

(1) さとうきび生産農家の生産性向上

研修を通じて、担い手への農地集積が上手くいっていない現状やギニアグラスの農薬の土壌処理、土づくりの一環として深耕の必要性について認識が高まった。

(2) 関係機関・団体との方策検討

令和17年度を目標とするさとうきび増産計画を策定した。また、病虫害防除や干ばつ時の散水など、防災無線やCATVで随時周知し、啓発に努めた。

(3) 優良種苗の確保

原苗ほの審査を通じて、生産者の適正管理を確認できた。

1 対象

JA さとうきび部会 2,800 戸，ハーベスター連絡協議会 110 人，徳之島新ジャンプ会 36 人，大規模農家 1 戸，原種ほ生産者

<連携機関>

徳之島さとうきび生産対策本部，徳之島地域総合営農推進本部糖業部会各町糖業部会，さとうきび農作業受委託調整センター(南西サービス)

2 課題を取り上げた理由

さとうきび生産農家戸数が減少している中で，規模拡大志向農家への農地の集積，集約が進んでいないため，面積の維持拡大につながっていない。

株出し，春植えは，収穫期と作業が重なるため，管理作業等が遅くなり，単収が低下する要因となっている。また，夏植えは植付時期が高温下であること，収穫までに時間を要すること，単収が高いとハーベスター収穫が出来ない等の理由により面積が伸びていない。

農作業受委託調整センター(南西サービス)のほ場管理システムが導入されているが，生産実績の突合による生産性向上や作業の効率化への活用がなされていない。

3 活動内容と成果

(1) さとうきび生産農家の生産性向上

ア 研修会等の実施

担い手の規模拡大事例や雑草対策，土づくりなどの研修を行った。研修会では，昨年実施したハーベスター所有者へのアンケート調査報告や雑草対策，土づくりなどの研修を行った。担い手への農地集積が上手くいっていない現状，生産者が行っているギニアグラスの農薬の土壌処理，土づくりの一環として深耕の必要性について認識が高まった。



室内研修



現地研修

イ 省力化及び環境負荷軽減技術の検討

気象要因などにより実施が困難であったため、生産者と検討し、次年度の取組とした。

(2) 関係機関・団体との方策検討

定期的な会議の中で病害虫の発生や干ばつの状況などの情報共有と対策について防災無線やCATV等で周知した。また、令和17年度を目標とする次期増産計画の検討を行った。

サトウキビ黒穂病について

令和6年に、奄美群島でサトウキビ黒穂病が発生し、徳之島でも一部地域での発生が確認されました。

※黒穂病とイネヨトブによる被害は症状が異なります

先端部が黒くなる	茎全体が茶色く枯死
	
サトウキビ黒穂病の症状	イネヨトブによる被害

黒穂病の症状の発症として、病気の株は健全株よりも葉が細く、節間が伸びて延長し、先端部は長いムチ状（黒穂）となることから分かります。発病した株は枯死するため減収の原因となります。

この病気は、5～7月頃に発生しやすく、被害は株出し後期に多いです。また、株出し回数が多いほど発生も多くなります。

サトウキビ黒穂病が発生、または、疑いがある場合は、関係機関・団体へ連絡し、早急に抜き取り等の対策を行うことが重要です。

農業普及課だよりでの黒穂病啓発



イネゴの被害状況調査

(3) 優良種苗の確保(原種ほ審査)

関係機関・団体と春植え用苗、夏植え用苗の審査をそれぞれ年2回行い、管理が適正にされていること確認できた。

しかしながら、現行の苗生産では健全芽の確保や調苗が困難などの課題も確認できた。



優良種苗生産検討試験ほ

(4) 農作業受委託調整機能の強化支援

受託調整センターでは大学等と連携し、ほ場管理システムとほ場の生産実績入力に取り組んでいる。また、バッタ被害への農薬の一斉防除の体制づくりを検討したが、実施には至らなかった。

4 今後の課題

(1) さとうきび生産農家の生産性向上

今年度、実施できなかった省力化及び環境負荷軽減の実証による効果検証を行う必要がある。

(2) 関係機関・団体との方策検討

さとうきび増産計画に基づく、担い手の育成、面積拡大、単収向上等の目標達成に向けた取組を検討する必要がある。

(3) 優良種苗の確保

生産者から要望がある効率的な苗づくりの検討を行う必要がある。

(4) 農作業受委託調整機能の強化支援

生産実績と連動した地図情報システムの活用について検討を行う必要がある。

5 担当した普及職員(〇はチーフ)

〇前田、松本